

山本有造編著

## 『満洲——記憶と歴史——』

京都大学学術出版会 2007年 viii+363ページ

ひろ かわ さ ほ  
広川 佐 保

## I

「満洲」という言葉からは、どのようなイメージが想起されるであろうか。地域史の文脈からみれば、「満洲」は、満洲王朝の故地とモンゴル盟旗地域を併せた地域であり、中華民国時期には、張作霖が東北三省の覇権を握っていた。さらに「満洲事変」以降、日本によって「満洲国」が建設され、1949年以降は人民共和国に包摂された地域である。一方、日本史の文脈からみれば「満洲」は、日本の大陸侵略、満洲移民、「残留孤児」を想起させ、さらに残留日本人による戦後賠償問題が今日の問題として存在する。本書もこれら「満洲」の引揚げ問題を軸に記憶と歴史を主題とする。

満洲移民や引揚げ問題に関しては、これまで数多くの研究が行われてきた。研究史を概観すれば、満洲移民史研究会（1976）、高橋（1997）のほか、開拓団を扱うものとして、小林（1977）や飯田市歴史研究所（2007）があげられ、歴史社会学の分野からは満洲移民問題を取り扱った蘭（1994）があげられる。このほかに、地方自治体による記録や、個人の手記や記録、一般向けの書籍が刊行されるなど、満洲移民や引揚げ問題に関しては多くの蓄積がある。そのなかで本書は次の点で独自性を持つ。第1に「記憶の歴史化」に光を当て、これまでの歴史記述ではみえなかった、あるいはみようともしなかった側面に注目し、新しい眼で歴史を見直す点である。そのためここではオーラル・ヒストリーないし、ライフ・ヒストリーという手法が重視されることとなる。第2に、国家体制の変化にともなう難民の流出・還

流という、今日まで続く世界的現象のなかで、第2次大戦後の日本人の「引揚げ」という現象がどのような特質を持ったのか、という問題に光を当てている点である。第3に、これらの問題を明らかにするために、日本植民地史、中国現代史、歴史社会学といった複数の立場から、「満洲」の「記憶」を歴史に「昇華」する方法を探ろうとする点である。このような独自の試みが本書の特色である。

## II

本書はIV部10章によって構成されている。その具体的な内容は以下のとおりである。

まえがき（山本有造）

第I部 「満洲」1945年

第1章 「満洲」の終焉——抑留・引揚げ・残留——（山本有造）

第2章 戦後中国東北における政治的正統性の源泉——「東北抗日聯軍」の記憶から「北満根拠地」へ——（西村成雄）

第II部 「満洲」の記憶

第3章 想起される「満洲」——岐阜県郡上村開拓団を事例として——（猪股祐介）

第4章 「南満」日本人移民とその記憶——錦州省盤山県鯉城開拓団の「満洲」体験——（小都晶子）

第5章 哈爾濱の日本人——1945年8月—1946年9月——（上田貴子）

第6章 「満洲勞工」の記憶——黒龍江省東寧県における聞きとり実践——（坂部晶子）

第III部 中国残留日本人

第7章 中国「残留」日本人の記憶の語り——語りの変化と「語りの磁場」をめぐる——（蘭信三）

第8章 「中国残留日本人」の語られ方——記憶・表象するテレビドキュメンタリー——（南誠）

第IV部 知に刻まれた「満洲」

第9章 学に刻まれた「満洲」の記憶——杉野

忠夫の「農業拓殖学」——(藤原辰史)  
 第10章 日本人建築家の見聞と設計——建築家の「記憶」とその「歴史」化——(西澤泰彦)

第I部では「満洲」における日本人引揚げと、その後の中国東北社会の政治変動に焦点があてられる。第1章では、1945年敗戦直前の「満洲」に在留した132万人の日本人の概要が数値化されている。そのうえで、日本の敗戦後の動きについても様々な統計・文書資料から、敗戦以降の日本人の捕虜、戦犯、避難、死亡者数などが推定される。また、引揚者、留用者、そして残留者の概要も手際よくまとめられている。

つぎに第2章では、中国東北社会における「抗日」運動について分析するために、ここでは主に中国語文献をもとに、雲南省大理県出身・白族の周保中を取り上げる。周は1926年国民革命軍に参加後、27年4月に中国共産党に入り、32年1月から45年8月までのあいだ、東北抗日聯軍を指導した人物である。周は1940年代、ソ連とも連携を試み、45年9月以降は新設の「合江省」地域を中心に接収を開始する。ここでは周が、国民政府軍との対抗関係を保ちながら「剿匪」作戦を展開し、地域社会において中国共産党の礎場を固めていく過程が詳述される。

第II部では「満洲体験者」の記憶の語りを、歴史的・歴史社会学的に論述することを試みる。第3章では、岐阜県から「北満」に移住した群上村開拓団を対象に聞き取り調査を行い、そのなかから3名のインフォーマントを抽出し、彼らの「記憶」をもとに満洲での生活、引揚げ、戦後の開拓までを再現しようとする。ここでは彼らの「想起された満洲」と「満洲移民の物語」との関係性が検討される。

第4章は、「引揚げの悲劇」を回避した「南満」の事例として、広島鯉城開拓団を取り上げる。まず、1930年代の広島県の開拓政策とその特徴が概観され、そのうえで40年、日本政府により広島県から転廃業者が開拓団に編成されたことが記される。鯉城開拓団の入植地は、満洲国政府が錦州省盤山県の「未利用地」に中国人労働者を動員して建設した「集

団農場」であった。鯉城開拓団はここで水田開発に従事することになるが、1946年に引揚げを開始する。ここでは満洲国時代の「水田開発」の記憶は日本と中国双方に大きな影響力を残したことが指摘される。

第5章は、「満洲」の大都市ハルピンと引揚げの「記憶」を取り上げる。まずハルピンがロシアと中国という2つの社会から構成され、そこに日本人社会が成立した歴史を概観する。そのうえで、日本人住民の手記・回想録をもとに、日本敗戦以降のソ連進駐、八路軍の入城と接収、日本人の遣送、日本人社会について検討し、都市住民と奥地避難民の体験の差異があったことが指摘される。

第6章は、満洲国時代、日本側に徴用された労働者—「勞工」の記憶を扱う。まず、黒龍江省東寧県の概要と植民地者である日本人側からみた「語り」の概要が示されたうえで、勞工経験者たちの集合的な記憶とその形成プロセスについて記される。ここでは中国の「文史資料」の記述により、勞工経験者の「集合的記憶」の枠組みがステレオタイプ化されていることを指摘し、これが侵略を記憶し抵抗を教えるという中国社会のネイション・ビルディングの物語であるとする。そのうえで公式的な記録から排除された個別の証言や記憶をもう一度描き出す重要性が強調される。

第III部では、歴史社会学的立場から、中国に残留した日本人の記憶を扱う。第7章は、戦後日本社会において満洲移民や中国残留日本人に関する記憶の語りが抑圧されてきたとし、彼らの記憶と日本社会における「正当」な記憶との関係を探ろうとする。そのため、中国残留日本人の記憶の語りをもとに、彼らの記憶の語りが「祖国を訴える語り」から「祖国に訴える語り」へと変化してきた背景について検討する。

第8章では、テレビドキュメンタリー番組をもとに、そこで中国残留日本人がいかにかに表象され、両者が互いに影響しあったのかを考察する。そうしたなかで中国残留日本人が「戦争被害者」であることが強調され、こうした認識が社会的に再生産されたとする。

第IV部では、日本知識人と「満洲」のかかわりに

ついて、農学と建築史という分野から検討している。第9章では農学研究者として満洲開拓に参加し、東京帝大、京都帝大に在学・在籍した知識人、杉野忠夫が取り上げられ、彼が「マルキスト」から農業体験を経て、開拓論者、加藤完治と親交を深め、満洲移民運動へ参加していく様相が描かれる。ここでは戦後記された杉野の論文をもとに、「マルキストの記憶」、「満洲の記憶」と、晩年の「農業拓殖学」との関係について見出そうとする。

第10章では、建築史の立場から、20世紀前半、中国東北地域において日本人建築家が設計した建築物をもとに、建築家の意識と建築物が示す事実について検討している。ここではまず建築を読み解く手法が示され、それをもとに建築物の存在意義について検討していく。いくつかの満洲国の建築物を取り上げ、これらの設計にかかわったそれぞれの建築家の履歴や意識が提示される。そして建築家の「意識」によって生み出された建築物が歴史を示す存在であるとまとめられている。

### III

評者はこれまで、中国東北や内モンゴルの近現代について、土地制度史、経済史的観点から取り組んできた。ここでの関心も主として地域史からの視点であることを記しておきたい。以下、本書の意義について記すこととする。

先にも記したように、本書の第1の意義は、日本植民地史、中国近現代史、歴史社会学、建築史などの分野から、多角的に「満洲」の歴史と記憶に迫ろうとする点である。たとえば、第4章は、中国東北地域史の文脈から「満洲移民」問題を捉えなおそうとするものであり、第10章でも、日本人設計の建築物を通じて、建築家たちがとらえた中国社会の像が浮かび上がる。こうした論点から、われわれは「満洲」の歴史と現地社会との接点を考える手がかりを得ることができるだろう。第2の意義は、本書の各論に、日本や中国において各筆者によって実施された聞き取り調査や、貴重な資料調査などが盛り込まれている点である。これにより、従来、想起されて

きた「満洲移民」と様々な媒体に表象される「対象」を比較することが可能となった。本書におけるこうした姿勢は、「満洲」研究の新しい境地を開こうとする意欲的な試みであるといえる。第3に、日本社会のなかで忘れられがちな、「残留」日本人問題に着目することによって、彼らの置かれた立場や境遇に再び光を当てようとしたことである。このように本書では、「満洲」にかかわる過去と現在の問題を様々な視点から読み解こうとする。

本書では以上のような重要な議論が展開されているが、以下では、評者の関心に基づいていくつか感想を述べることにしたい。まず、本書でも利用される「語り」ないし、口述資料の問題についてである。近年、様々な分野において記憶と歴史、オーラル・ヒストリーをめぐって議論が展開されてきた。大門（2006）が指摘するように、たとえば、歴史学のオーラル・ヒストリーの立場では、オーラル史料を歴史史料として用いるための意義付けが検討され、また戦争被害など文書記録として残りにくい記録を救い上げることが評価されている。一方、文化人類学や社会学の立場からは、オーラル史料が示す世界そのものを重視し、そこから対象を再構築するという試みがなされている。たとえば、桜井（2002）によれば、社会学におけるライフ・ヒストリー研究のアプローチ方法は、実証主義、解釈的客観主義のほか、対話的構築主義を重視する立場を取る。このように、オーラル史料をめぐって、歴史学と文化人類学、社会学などでは立場の違いが存在するといえよう。

本書のなかでも、歴史社会学の立場から、人々の「語り」から彼らの生きた世界を再構成する論説と、歴史学の資料に口述資料や回想録を利用する論説が盛り込まれている。これらは、日本や中国の様々な地域において独自になされた調査や方法をもとに、対象に迫ろうとする重要な試みである。しかしながら、ここでは本書をつらぬく概念設定がなされていないため、「記憶」や「語り」から再構築されるライフ・ヒストリーと、歴史学分野のオーラル・ヒストリーとの相関関係が、判然としないままになっているように感じられた。それぞれの学問領域における研究の可能性と限界について議論、あるいは総括

してもよかったのではないか。さらにいえば、本書のなかでこれまでの先行研究や資料の位置づけが明示されていないことも、研究史における位置づけのわかりにくさにつながったと感じられる。以上の点について総括がなされていたならば、より本書の意義は高まったと考えられる。

また、上記の問題とも関連するが、これまで「満洲」の歴史に関しては、中国や日本、そのほかの地域において多くの歴史史料が発掘され、これに関する文献目録も多く刊行されてきた。こうした状況において、史料の検討が不十分なまま「語り」や回想録を中心に社会を再構成することには限界があるようにもみえる。

つぎに地域史の観点から、本書の内容について考えることにしたい。本書は「満洲」への移民や引揚げに重点が置かれるため、主に日本からの視点を通してみた歴史が主題となっている。日本がみた「満洲」社会と現地社会のあいだにはどのような関係があっただろうか。たとえば、現実の「満洲」社会は、20世紀初頭には東北三省と内モンゴルの盟旗の地域などから構成され、ここには漢、満洲、モンゴル、朝鮮、ロシア、ツングース系の諸民族が居住していた。これら中国東北社会は、日本支配時代に限らず、主に満洲の旗地や蒙地に漢人や朝鮮人の労働者・農民が流入するという移住社会が形成されていた。こうした重層的で複雑な社会に、新たに日本が満洲国を打ちたて、様々な政策を実施していった。「満洲」に移住した日本人が個々の背景を持つと同じく、地域社会にもそれぞれ地域の歴史や慣習が存在する。それゆえ「満洲」における日本人の歴史や記憶も、

地域の歴史と相互に位置づけられてはじめて意味を持つといえる。「満洲」という地域の歴史や記憶を読み解くためには、日本や中国といった国家の枠組みからのみみるのではなく、むしろ地域史の文脈との対話が必要となってくるであろう。

以上、本書に対する評者の感想を述べた。日本の「満洲」支配が現地社会に残したものについて考えるとき、「満洲」の「記憶」が決して日本人に限定されたものでないことに気づかされる。本書に示されたような日本人の「記憶」は、今後、現地社会における「記憶」や歴史と照らし合わせることで、より深い歴史像を結んでいくであろう。

#### 文献リスト

- 蘭信三 1994. 『「満洲移民」の歴史社会学』行路社。  
 飯田市歴史研究所編 2007. 『満洲移民——飯田市下伊那からのメッセージ——』現代史料出版。  
 大門正克 2006. 「コメント——歴史学からの接近，歴史学への接近——」『歴史学研究』811（2月）20-22。  
 小林弘二 1977. 『満洲移民の村——信州泰阜村の昭和史——』筑摩書房。  
 桜井厚 2002. 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方——』せりか書房。  
 高橋泰隆 1997. 『昭和戦前期の農村と満洲移民』吉川弘文館。  
 満洲移民史研究会編 1976. 『日本帝国主義下の満洲移民』龍溪書舎。

（新潟大学人文学部准教授）